

団体概念の起源

神秘体 (corpus mysticum) とは何か

キーワード

団体の概念, 神秘体 (corpus mysticum), 神秘体としての教会, 神秘体としての国家, 神秘体としての株式会社, キリストの二つの身体, 王の二つの身体

中京大学経営学部教授 中 條 秀 治

目 次

- はじめに
- 神秘体 (corpus mysticum) とはなにか
- 1 キリストの神秘体 (Corpus mysticum Christi)
 - 聖餐
- 2 教会の神秘体 (Corpus Ecclesiae mysticum)
 - キリストを頭とする教会
- 3 神秘体の団体化 教皇を頭とする教会
 - 神秘体としての教会
 - 1 神秘体としての教会
 - 2 教会の永続性 キリストの二つの身体
 - 3 教会財産の独立性と機関としての教皇
 - 神秘体としての国家
 - 1 神秘体としての国家
 - 2 国家の永続性 王の二つの身体
 - 3 国家財産の独立性と機関としての国王
 - 神秘体としての株式会社
 - 1 神秘体としての株式会社
 - 2 株式会社の永続性
 - 3 会社財産の独立性と機関としての経営者
 - おわりに 神秘体と団体の概念

はじめに

株式会社の本質を理解するためには中世キリスト教の神秘体 (corpus mysticum) の議論

まで辿る必要がある。

ウェーバーは、会社財産の独立性の議論の起源として、「委託された財産に義務を負っているとの思想」の根源は、神秘体 (corpus mysticum) にあるとして、以下のように述べる。

「職場、店舗、一般に『営業所』と住居商号と姓名 営業資本と個人財産、こうしたものの分離、そして『営業』(さしあたって少なくとも会社財産) を一種の corpus mysticum (教会の信徒すべてが共同にあずかりうる神秘なる聖体) に転化させるという傾向は、すべてこの方向にそったものである。」(Weber, 1920, 訳 p. 274 の注 4.)

ここで言及されている神秘体 (corpus mysticum) は中世キリスト教会におけるキリストの身体をめぐる議論として登場する言葉である。神秘体という言葉は、各方面に影響を与えることになるが、キリスト教会をめぐる神秘体の議論は、国家を神秘体とする議論に転用され、やがてはあらゆる社会制度的存在のアナロジーとして用いられ、中世の都市や大学、さらには株式会社についての解釈にも影響を与えたので

ある。

本稿では、神秘体としての教会、神秘体としての国家、神秘体としての株式会社を検討し、これらに通底する共通概念として団体の概念を再構成してみようと思う。

神秘体 (corpus mysticum) とは なにか

神秘体 (corpus mysticum) の議論についてはカントロピッチが『王の二つの身体 祖国のために死ぬこと』という著作の中において、詳細に論じているので、その議論を辿ることにしよう。

神秘体についての解釈の変遷は以下のように整理できる。

1 キリストの神秘体 (Corpus mysticum Christi) 聖餐

「キリストの体 (corpus Christi) としての教会という観念自体は聖パウロにまで遡る。しかし 神秘体 (corpus mysticum) という用語は聖書の伝統には見られないものであり、我々が想像するほどには古い用語ではない」(訳 p. 258) とカントロピッチはいう。神秘体という用語はカロリング朝時代、コルビー修道院に属していたパスカシウス・ラドベルトウスとラトラムヌスとの間で戦わされた聖餐論争の過程で、ラトラムヌスが「苦しみを受けた肉体がキリストにとって『固有の真なる体』(proprium et verum corpus) であるのに対して、聖餐はキリストの 神秘体 である」(訳 p. 258) と表現したことで普及するようになったという。

「最後の晩餐」でイエスがパンと葡萄酒を指し示し、「これは私の体であり、血である」と言ったという逸話から、パンと葡萄酒を意味する聖餐がキリストの神秘体と呼ばれた最初だということである。聖餐式はキリストの血肉を体内に入れる秘儀であり、キリストを内在化し神と一体化するための重要な宗教儀式である。このように神秘体という言葉は、初期には秘跡により聖餐 (パンと葡萄酒) がキリストの体 (血肉)

に変わることを意味していたのである。

2 教会の神秘体 (Corpus Ecclesiae mysticum) キリストを頭とする教会

聖餐を意味した神秘体という用語は、比較的新しい用語法として、教会を意味するものに変化する。

「過去、未来および現在の信徒たち、現実に存在する信徒と同時に潜在的な信徒たちすべてで構成されたキリスト教社会」を意味する「キリストの神秘体としての教会」という用語法が出現する。これは、「歴史家にとって典型的に中世的な観念、そしてきわめて伝統的な観念」であると思われるが、「比較的新しい観念」であるとカントロピッチは指摘している (訳 p. 258)。

カントロピッチ (訳 pp. 258-260) によれば、教会ないしキリスト教社会はもともと「キリストの体」と呼ばれていたが、神秘体とは呼ばれていなかったという。神秘体と呼ばれたのは聖餐式のパン、正式にはホスティアと呼ばれるものであった。しかし、これが「奇妙で捜索した位置変換 (un curieux chasse-croise) をして、12 世紀半ばに、教会そのものが神秘体となるのである。すなわち、「キリストの体」という用語は、もともとは「キリスト教会」を指し示していたパウロの用語であったものが、今や聖餐式における「聖体」(ホスティア) を指し示すようになったわけであるが、これとは逆に、従来までは常に「聖体」を意味していた 神秘体 の観念が「キリスト教社会の組織体たる教会」へと移されていったというのである (訳 pp. 259-260)。

つまり、「キリストの二つの体」として、「一つは祭壇上の個体としての 真の体 たる聖体、もう一つは集合体としての 神秘体 たる教会」(訳 p. 261) が意味されるようになる¹。

「教会史における一つの転換期」として、「最終的に 1215 年に化体説の教義へと到達し、これにより、聖餐は (真の体) として公式に命名されることになった² が、これに随伴して、「制度的・教会論的な側面における教会を指し

示すものとして、神秘体 という言葉」(p. 260) が使われるようになったという。1302年の教皇ボニファティウス八世による教令『ウナム・サンクタム』の碑文には、「信仰により促され、余は普遍的にして使徒的なる唯一の聖なる教会を信ずるべく義務づけられている……この教会の外では救済も罪の赦しもありえない……、そしてこの教会は、キリストを頭とする一つの神秘体を表わしており、キリストの頭は神である」(傍点筆者、訳 p. 257) と記されている。

カントロビッチはここで以下のような注目すべき分析を行う。

「……教会とその構成員を一つの あるいは何らかの 人体になぞらえる慣例上の擬人的比喩が、これよりもいっそう特殊な比喩、すなわち 神秘体 としての教会をキリストの個体としての身体 キリストの真のあるいは自然的な身体 になぞらえる別の比喩と、並列的に置かれているのである。……個体としてのキリストの自然的な身体は、社会的で団体的な機能を与えられた有機体として理解されたのである。すなわち、頭と四肢を具えたキリストの自然的な身体は、神秘体 たる教会という超個人的な集合体の原型および個体原理として機能したのである。」(訳 p. 266)

ここでは、教会と信徒を一体のものとして比喩的に擬人化する考え方とは別に、教会を神秘体としてキリストの身体になぞらえる比喩が併存している。それぞれの比喩は同じように「体」に関わるアナロジーを用いており、一見おなじようにみえるが、本質的な差異を含んでいる。ここには、個々の信徒の集まりを一つのものと考える集団的な解釈と教会それ自体が神秘体として立ち上がる団体的な解釈が含まれている。前者の立場は、平等な信徒の集合体イメージの集団論的解釈となっている。他方、教会そのものを神秘体とするのは、信徒を超える存在を想定する団体論的解釈につながる。

ここで重要な点は、歴史的事実として、信徒共同体の個々の構成員を重視するプロテスタント的な立場と教会そのものを構成員を越える存在として解釈するカトリック的な立場の違いが先鋭化するということである。前者の個々人としての信徒の集まりを重視する立場は、教会の共同体の性格にこだわるのであり、プロテスタントの「万人祭司性」の考え方につながる。これに対して、教会を神秘体とする立場は、教会そのものが教団として組織化の傾向を強め、その権威においてもキリストと教会の同一性を主張するまでになり、次に述べる教会の団体化につながる。

3 神秘体の団体化 教皇を頭とする教会

「キリストの身体には二つのものがある。一つは彼が聖処女マリアから受け取った人間の肉体であり、もう一つは霊的な団体、すなわち教会の団体である」(訳 p. 260) という表現からうかがえるように、「キリストの神秘体」が「キリストの霊的団体」から教皇を頭とする「教会の団体」へと変化してゆく。このような用語上の変化が起こったのは、「社会の団体的および有機的構造に関する諸理論」が政治理論に浸透し、影響を及ぼし始めた時期と合致していたという(訳 pp. 263-264)。

「もともとは典礼上の観念であり、かつては聖餐において統合される教会を高挙するために用いられた 神秘体 は、教皇の皇帝類似の地位 『キリスト教の全政体を動かし規律する第一の君主 (primus princeps movens et regulans totam politiamam Christianam)』 を高挙する手段として、位階的な教会内部において用いられ始めた」(訳 p. 268) という。キリストの代理者としての教皇は、「教会の神秘体」の頭となり、手足としての信徒は「教会の頭たるローマ教皇」へと関係づけられた(訳 p. 269)。

「聖別された聖体があるところではなく、教皇のいるところに 神秘体 が現在する」と考えられるようになり、「長期にわたる経緯を通じて、典礼上および秘蹟上の 神秘体 が、教皇を頭とする神秘的政体へと推移していった」

(訳 p. 270) ののである。

教皇を頂点とする教会を神秘体とする団体論的解釈は、教皇権が強化されるに呼応して主張された考え方である。キリスト教を普及する教団としての教会に存在としての正当性をもたせるためには、教会そのものがキリストの神秘体であるという説明がなされる。さらに、キリストと教会の同一性を主張する立場を敷衍することで、教皇の地位がキリストと同等なものとして扱われるようになる。頭であるキリストの意思は教皇を通じて表明されるということだから、実質的には教皇を頂点とし、信徒を組織構成員としての教団活動が行われることになる。

このカトリシズムの教会観・教皇観に対しては、「キリストはあくまで教会の主でいまし、教会はキリストの下に立つ」(ボンヘツファー、訳 p. 43) との批判を展開した 20 世紀初頭の宗教思想家であるボンヘツファーの立場を対比すれば、ここでの論点が明確となる。教皇を頂点とする教会を神秘体と考える議論は、平等な信徒共同体を想定する集団レベルの議論から、教会そのものが人格化し、機関である教皇をトップとして組織的統制を強める団体論的な解釈に移行している。つまり、すべての構成員を教団の位階制度のもとに秩序付け、教団の維持発展を図るような団体論の議論に立ち至っているのである。

ここでは、「キリストの神秘体としての教会」から教皇を頭とする「教会の神秘体 (corpus Ecclesiae mysticum)、すなわち神秘体として成立した団体としての教会」への発展が確認できる。「キリストの神秘体」とみなされてきた教会が、「今やそれ自体において独立の一つの『神秘体』」となるのである。そこから、「教会という有機体は、ほとんど法学的な意味における『神秘体』、すなわち『神秘的な法人』」(訳 p. 266) と解釈されるようになる。

このような用語上の変化は、偶然ではない。そこには、「教会の法的身体 (corpus ecclesiae juridicum) たる聖職者の制度的団体が 教会の神秘体 (corps ecclesiae mysticum) と合致すること」ができるように、「神秘体」

の観念を世俗化してゆく動きがあった (訳 p. 266)。

カントロピッチは、次のように要約している。「神秘体」という新しい言葉は、キリストの法的な体 (Corpus Christi Juridicum) をすなわち 戦う教会 (Ecclesia militans) の基礎にある巨大な法的・経済的な統治機構をいわば同時に聖化することによって、可視的な教会組織の構築物を以前の典礼の領域と連結させたのである。」(訳 pp. 260-261)

神秘体としての教会は、「一つの霊的な団体」から、法的な抽象観念である『神秘的な人格』によって置き換えられてゆく。この『神秘的な人格』という観念は、「法律家が法思想のなかへと導入し、後期中世を通じてきわめて多くの政治理論の基礎に置かれることになる 表象された人格 (persona repraesentata) ないし 擬人的人格 (persona ficta)」(訳 p. 267) と同義の概念である。

神秘体としての教会

1 神秘体としての教会

教会は「信徒すべてが共同にあずかりうる神秘なる聖体」であったが、やがて教会組織の整備・強化とともに、階層性をもつ教団組織のイメージで再構築されてゆく。つまり、平等なる信徒の共同体というイメージが、「教皇を頭として、信徒を手足とする教会」という教団組織へと変化するのである。ここには平等な信徒を構成要素とする平等な集団的關係は存在せず、その頭である教皇からの一方的な命令で動く手足としての信徒が階層下位の組織構成員として位置づけられている。教義上はキリストが教会の頭であるが、現実的にはバチカン教会が『神秘的な人格』となり、その機関のトップである教皇が頭である。

2 教会の永続性 キリストの二つの身体
神秘体としての教会は、永続体である。神秘体としての教会は、キリストの不死なる体の地上における現れであり、教会というものが「肉

体をもたず可死的でない」がゆえに、永続体と定義された（訳 pp. 270-271）。

「キリストは人であると同時に神であり、したがって教会の神秘体の頭は永遠に存在する。それゆえキリスト自身の永遠性は、同じくその神秘体に対しても永遠性を、あるいはむしろ無時間性という価値を付与することになる。」（訳 p. 349）

3 教会財産の独立性と機関としての教皇

神秘体としての教会は、教会財産の独立性をもつ。オッカムのウィリアムが教会財産を譲渡する権限を教皇に対し否定したとき、教皇が教会財産を譲渡しえない理由は、「これらが教皇個人に属するのではなく、『神と、教会たる神の神秘体』（*Dei et corporis eius mystici quod est ecclesia*）属するから」（訳 p. 270）というものである。教皇といえども、教会財産を勝手に譲渡することはできない。なぜなら、教会財産は神のものであり、教皇の個人財産ではないからである。そして、教皇に限らずキリストの信徒すべては神に仕える僕でしかなく、地上で自ら稼いだ財貨といえども、宗教的な感覚からいえば、神の財産であり、神からの預かりものである。

神秘体としての教会が教団組織として成立すると、教皇の地位は教団の機関としての地位となる。

教会と教皇の関係については、キリストの「代理人」としての教皇という解釈があるが、これとは別に、教会の神秘体を教皇が「代表」という解釈もある。前者はキリストを頭として信徒を手足とする信徒共同体の代理人として教皇を位置付ける集団的解釈であり、後者の場合は教会という神秘体が一つの団体として成立し、教皇はその代表機関と位置付けられている。教会が団体化し、「神秘的人格」の主体となれば、教皇はもはやキリストの代理人ではなく、教団の代表という機関的役割を果たすことになる。

神秘体としての国家

1 神秘体としての国家

カントロピッチはいう。

「祖国に対する献身の主要な原因は、歴史の或る時点において、国家が教会と比肩しうる神秘体として現れた事実に存するのである。

祖国のために死ぬこと、神秘的かつ政治的な身体のために死ぬことが意味をもつのは、このためであった。すなわち、キリスト教の信仰や教会や聖地のために死ぬことと同じ価値と重要性とをもつと見なされることによって、祖国のための死も意味なものになったのである。」（訳 pp. 343-344）

12世紀に、教会が「キリストの神秘体」として確立されたとき、国家も自らが「神聖なる帝国」（*sacrum imperium*）たらんと標榜し、両者の相互作用を通じて、「霊的な神秘体と世俗的な神聖なる帝国」が同時期に形成された³（訳 p. 260）。神秘体の観念がひとたび教会により明確にされるに至ると、世俗国家も教会の模範に従ったという（訳 p. 300）。国家は、「擬似的な教会ないし理性的な基礎を有する神秘的団体となる傾向」⁴を示すようになる（訳 p. 256）。

国家の「身体」という用語に代わり、国家の「神秘体」という用語が使われるようになると「国家というものを、その純粹に自然的な存在形態から引き上げて超越化しようとする意図」をもった国家概念への変質が起こるのである。

カントロピッチは以下のようにいう。

「人が国家を教会の神秘体の類似物として構成しえたのは、まずもって国家が一つの「身体」として考察されえたことによる。両者の類比関係は、身体（コルプス）という言葉に依存しているものであり、人格という言葉（ベルソナ）という言葉にはない。これはちょうど神学者たちが、キリストの二つの人格ではなく、（キリストの二つの身体）について考察したのと同様である。⁵」（訳 pp. 347-348）

カントロピッチは、神秘体という「身体」

(corpus) の議論を飛び越えて、一挙に「人格」(persona) の議論に進むことを戒めている。そして、神秘体の議論を経ないで、いきなり「法的な人格」を持ち出すような考え方は「用語法自体がこれを許さないのである」(訳 p. 349) と強い調子で述べている。

1300 年前後においては、国家は「擬人的人格」ではなく、「政治的身体における頭と四肢の古来の有機的合一」としての「有機体論的な統一性」と考えられていた。すなわち、「王国」や(祖国)は人格化されてはならず、むしろそれは、「身体化」されていた」というのである。重要な点は、神秘体としての国家という観念が先に成立し、それが法律家により「擬人的人格」の観念に変わってゆくのである。神秘体としての国家が「人格化された国家の抽象観念」へと性格を変えてゆくということである。

2 国家の永遠性 王の二つの身体

揺籃期の世俗的な国民国家は、「これまでは教会のみに帰せられ、またローマ法やローマ法学者たちによってローマ帝国に帰せられていた(帝国は永遠なり)(Imperium semper est)

恒久性ないし永遠性を自らに要求し始めた」(訳 p. 254) という。主権国家は、自らの本質を聖化する動きに出たが、この場合、「新たに生まれた国家それ自体が世俗の神秘体として、さらにその団体的様態においても教会と同等な存在」(訳 p. 254) と見なされることによるのみ、神聖視されたのである。要するに、国家は神秘体となることでしか、国家の永遠性を説得的に説明することはできなかったのである。国家というこの神秘体は、教会の神秘体と同様の、「決して死ぬことがない」存在として、「永遠のもの」となったのである。

「王の二つの身体」という観念の背後に、カントロビッチは連続性の問題が潜んでいるとみる。王の自然人としての身体は、普通の可死的人間である。王は現実的に死を運命づけられた存在であり、「永遠の存在者」ではない。つまり「天使のように不可死かつ不可視で遍在的な性格を有し、未成年たることがなく、病気になっ

たり老衰することのない存在形態」(訳 pp. 349-350) ではない。王が天使のような不可死の存在となるためには、「何らかの仕方で不可死性という価値を獲得しなければならない」(訳 pp. 349-350) ということになる。

王の不可死性には三つの理念的源泉がある(kantrowicz, 1965, 訳 pp. 223-224)。一つは「キリスト中心的王権」であり、王は「キリストの代理者または似姿」として「神的超越性」を持つと考えられた。しかし中世初期の王権と教会の蜜月時代が終り、叙任権闘争後の国家と教会の分離が明確化する中で、国家は独自の超越性の根拠を必要とした。王は、神であるキリストが帯びていた永遠性を、「別の源泉」から受け取ることが必要であった。

では「永遠性」(character aeternitatis) を帯びた何らかの内在的価値はどこに見出し得たのだろうか。カントロビッチは「決して死ぬことのない」正義や法が「容易に無視することのできない永遠性の価値」として、「王冠の連続性」に関して大きな役割を果たしたと論じる(1957, 訳 p. 350)。これが 12~13 世紀に現われる「法中心的王権」の理念である。また、13 世紀以後には神秘体という「『決して死ぬことのない』統合体(universitas)」、すなわち不可死の政体という「政体中心的王権」の理念が姿を現わす。カントロビッチは「個々の王がこれらから容易に分離することはあっても、王朝や王冠や王の威厳がこれらから分離することはなかった」とも指摘している(1957, 訳 p. 350)。

3 国家財産の独立性と機関としての国王

神秘体に属する国庫というものの特殊な性格を記述する場合には、キリストと教会の関係のアナロジーである「婚姻のアナロジー」⁶ が用いられている。キリストは教会の頭であると同時に教会の花婿であるが、君主は国家の頭であると同時に夫でもある。ここでは、キリストと教会との関係が君主と国家の関係へと転移させられている。

国家財産の不可譲性については、「国庫というものを花嫁たる国家の嫁資と解釈し、夫には

単に妻の財産を利用する権限があるだけで、それを他に譲渡する権限はない」（訳 p. 283）と説明される。また、「婚姻の際に新郎と新婦の間で交わされる誓約を、王や司教が聖別される際に行われる誓約になぞらえている」が、「この誓約によって、王および司教という二つの頭職の担い手は、国庫と教会にそれぞれ属する財産を他に譲渡しないことを約していた」という（訳 p. 283）。神秘体としての国家概念は「それ自体で独立した存在である国家」であり、「王から独立し王には属さない所有権を与えられている国家」（訳 p. 283）という観念を明確化したのである。

キリストに関する「主の二つの身体」（duplex corpus Christi）というアナロジーが国王と国家の関係に移されると、「王の二つの身体」というコンセプトとなる。つまり、「自然人としての王の身体」と「国家として体現された王の身体」である。国家の神秘体 が出現したとき、「……君主は国家の神秘体の頭であり、場合によっては神秘体それ自体であるとさえ考えられ、したがって、教会の神秘体の頭であると同時に神秘体それ自体でもあるキリストに類似した存在と見なされた。また、キリストが彼の団体的身体のために自らの生命を捧げたのと同様に、君主も国家のために自らの生命を犠牲にするものと考えられた」（訳 p. 345）のである。つまり、国王は国家のために自己犠牲するのであり、国家という存在が国王が奉仕すべき上位概念となっているのである。

中世において自殺者が重罪を犯すものとされたのも、「自殺者は自分自身や誰か他の人間に危害を加えている」というよりもむしろ、「神秘体としての国家」に損失を与えているからだとの説明がある。すなわち、「自殺によって王が一人の臣民を失い、頭としての王が自らの神秘的四肢の一部を失うという意味において... - キリスト教の用語では 神秘体 ないしその頭に対して、害を加えている」（訳 pp. 345-346）と考えられたからなのである。

神秘体としての株式会社

1 神秘体としての株式会社

トマス・アクイナスは神秘体と代替可能な「神秘的人格」という言葉をすでに用いており、これは法学者が用いた「擬制的人格」（*persona ficta*）とほぼ同じものであったが、神秘体という観念は、「擬制的身体、想像された身体（*corpus imaginatum*）、表象された身体（*corpus repraesentatum*）といった観念やこれと似た類いのもの」と同義に、すなわち、「法的人格や団体」と同義に用いられてゆく（訳 p. 275）。これ以後、法擬制的人格は「神秘体」として定義されることが多くなり、「団体たる共同体の位階秩序に組み込まれた、あらゆる階層の、そしてあらゆる大きさの 統合体（*universitas*）に適用可能なもの」（訳 p. 275）となる。神秘体 という観念は、「意味の転移」によって、「より小さな社会集団」へと適用されるようになるが、さらには、「一定の法的な内包的意味合いを獲得し、……『擬制的』ないしは『法的』人格を意味するようになり、団体論的性格を帯びるに至った」（訳 pp. 274-275）という。

たとえば13世紀末フランドル（ベルギー）の哲学者ゴドフロワ・ド・フォンテーヌは、神秘体の概念を「或る種の社会的集団ないし集合体」と捉え、少し後のダンテは 人類の世俗国家（*humana civilitas*）と定義し、……ダンテ以外の人々は、必要に応じてこれを（人民）（*populus*）とか（国家）（*civitas*）、（王国）（*regnum*）ないしは（祖国）（*patria*）として、あるいは他の任意の社会的共同体や団体として定義するようになったという（訳 p. 278）。さらに後期中世の法学者アントニウス・デ・ロセリス（1386年生）は、村、都市、地方、王国、全世界の五つを、それぞれ 神秘体 と見なしたという（訳 pp. 275-276）。

このような神秘体の観念は、世俗社会の単位へ容易に移し替えられてゆく。このような流れの中で、中世の商業的な結合体に対しても、神

秘体の発想が適用されてゆくのである。

ウェーバー (1889, 英訳 p. 171) は会社財産の分割の起源を神秘体 (corpus mysticum) の観念と関連づけて理解している。パートナーシップにおける財産の在り方を分析する中で、ジェノアの教皇庁控訴院の判決では、ソキエタス (corpus societatis) を神秘体 (corpus mysticum) あるいは法人 (juristic person) と呼称していた判例があり、そこでのパートナーシップの資産は会社 (corporation) の資産として扱われていると述べている。

ウェーバーは、「歴史的ないし学說的観点からは、法人としてソキエタスを概念化することは、疑いもなく、正当化されるものではない」と付け加えている。そして、「いくつかの“名前 (nomina)” で構成された一つの人格としてのパートナーシップという表記は、商会 (firm) の人格化がパートナーから独立して存在する会社 (company) というものを制度化する手段であったということを証明している」と述べた後、「法の発展にとって、時間の法理がパートナーシップの資産を個人資産から分離するのを容易にした」と結論付けている。

2 株式会社の永続性

会社の歴史を鳥瞰図的に概観すれば、ソキエタス (societas) やコンメンダ (commenda) などのパートナーシップがあり、それはやがて商号で対外的に商売するカンパニーとなり、やがて法人として独立するコーポレーションへとつながる流れが確認できる。会社をどう捉えるかは、基本的に人間の集団としての会社観と人間存在とは別次元の団体が立ち上がる会社観に大きく二分できる。

前者の集団概念による会社は『やがて死ぬ』という人間集団の宿命的な限界をもっている。これに対して、神秘体のアナロジーで成立する団体としての会社は適切に経営される限り「死ぬことのない存在」である。それゆえ、株式会社は一種の神秘体として永続体であり、ゴーイング・コンサーンと呼ばれる。

3 会社財産の独立性と機関としての経営者
神秘体の概念を会社の所有問題にあてはめると、パートナーシップの資産についても二つの見方があり、一方はパートナーの集まりを一つの人格 (una persona) として捉える場合であり、この場合にはパートナーの資産は花嫁の持参金のアナロジーが解釈されていたという。これに対して、先ほど述べたジェノアの教皇庁控訴院の判決のようにソキエタスを神秘体として捉えた場合には、会社 (corporation) の独立した資産として扱われたのである (Weber, 1889, 英訳 p. 171)。

神秘体としての株式会社は会社としての所有権を主張する。それは構成員の財産とは分離された会社に属する財産である。一旦、法人格をもつ会社が成立すると、会社という団体の財産は法人に所有権が属するものであり、団体の長も自分の財産のように使用できない。社員である株主は株主共同体の構成員というイメージから出発するが、会社というものが神秘体として成立すると、会社は機関により運営される組織体となり、社員はその組織体の手足という位置付けとなる。これが神秘体のロジックである。

株式会社の起源には神秘体の発想があり、株式会社という神秘体が法人化する。神秘体としての株式会社は社員とは別の人格主体として概念化される。神秘体としての株式会社のトップの正当性の根拠は神秘体という存在により与えられるのであり、経営トップの地位は、会社の機関として理解されねばならない。

神秘体たる会社が成立したあとでも、社員である株主が主導権を主張するのは共同体のロジックであり、神秘体のロジックとは一致しない。株主という社員共同体が主導権をもつという論理を維持するのであれば、会社はその法人性を否定する必要がある。つまり、法人格をもつ会社の団体性をみずから否定するところまで論理を進める必要があるのである。しかるに、法人の成立を認めておきながら、株主が会社財産について所有権を主張することは、神秘体としての株式会社のロジックからはありえない事態なのである。

おわりに 神秘体と団体の概念

中世のキリスト教の神秘体が団体論の源流である。神秘体のアナロジーは特定の団体を一つの人格主体として見なし、「法人」として扱うことを可能とする重要な概念である。教会、国家、株式会社に共通している事実は、これら団体がすべて神秘体として解釈されたという歴史的事実である。そしてこれら団体が神秘体のアナロジーで解釈されて、「身体」(corpus)をもった存在として成立することで、その後の「法人」の議論が容易に進むのである。要するに、「身体 (corpus)」の議論が先にあって、「人格 (persona)」の議論が後に成立するのである。つまり、「擬制的人格」といった法律家が推進した「法人」の議論の前提として、神秘体という「身体」の実在性を前提とする議論が成立していることが不可欠なのである。神秘体の解釈の変遷を辿ることは、まさに神秘体という捉えどころのない宗教由来の観念が歴史的に実在とされてきたことを確認する作業である。

この神秘体という思想そのものがキリスト教という宗教を起源とするものである以上、神秘体の実在性というものは一つの観念の実在性としかきえないものである。しかし、神秘体のアナロジーを採用する各種の団体は、神秘体に共通する主要な特質を共有しているのである。神秘体という源流を探ることで、団体を巡る概念は格段に整理されたものとなる。

神秘体のアナロジーを採用して成立するすべての団体に共通する特徴としては、永続性、団体に属する所有権、機関としての団体トップ、の3つである。

神秘体は、それ自体が身体的な存在とみなされ、そこに関わる人間とは別の実在である。神秘体はキリストの身体と同様の「死ぬことのない体」である。それゆえ、神秘体のアナロジーで成立する団体は、ゴーイング・コンサーンであり永続体である。また、神秘体は構成員とは別個の独立した存在と考えられるため、神秘体

に属する財産はそこに関わる個人の財産から分離するという発想が採用されている。さらに、神秘体の頭として登場する者 たとえば教会の頭としての教皇、国家の頭としての国王、そして株式会社の頭としての経営トップ は神秘体を動かす中枢の機関として位置づけられている。つまり、神秘体という存在が主で彼らは神秘体に仕える者でしかない。神秘体こそが彼ら機関の行使する権威と権限の源泉なのである。それゆえ、神秘体の頭という地位を離れた瞬間に彼らの持っていたすべての権威と権力は失われることになる。

株式会社をめぐる論争、たとえば昨今のコーポレート・ガバナンスの議論に神秘体の特質を当てはめて考えてみると、きわめて明快な議論が可能となる。株式会社の起源に神秘体のアナロジーが適用されていたことは、ほぼ間違いのない史実であるから、株式会社を理解するためには、神秘体としての株式会社とそれ以前の通常の会社との差異を明確にする必要がある。

会社の発展史を概観すれば、パートナーシップの段階が中世ヨーロッパのソキエタスやコンメンダの議論である。これらは、構成員の集合としての共同体的性格を残しながら、しかも一つの全体性をもった有機体として集団論的に解釈される会社概念であり、後の合名会社や合資会社につながる。この流れとは別に、会社を団体論的に解釈する流れがある。会社は神秘体と解釈されるようになり、法人格を与えられて、株式会社 (corporation) の概念が17世紀初頭から数世紀にわたる試行錯誤の末に完成する。法人格をもつ株式会社という擬制的観念が成立し、株式会社は法人格をもって社会活動を行う社会的実在となるのである。

株式会社は個人企業の論理ではありえないし、またパートナーシップの論理でもない。株式会社の論理は構成員を超える観念的存在 (神秘体) を実在とする論理で成立する団体の論理である。それゆえ、「会社は誰のものか」というような現行のコーポレート・ガバナンスの議論の中核に位置する難問に対する答えも、このような神

秘体まつわる歴史的な解釈の変遷を俯瞰した後でならば、正しい結論を容易に導きだすことができるように思われる。すなわち、株式会社を株主の集合体と捉え、「会社は株主のものである」というような集団論的な解釈は神秘体の論理ではなく到底受け入れられないということである。

アメリカ型の株主主権論は、神秘体のアナロジーで株式会社が成立する以前のパートナーシップの会社についての議論であり、団体論的な存在形式を示す現行の株式会社に適用するには無理がある。一旦、概念構成体(神秘体)としての株式会社という法人を成立させたならば、会社という独立した存在の主体性をあくまで貫徹させる団体論的解釈をする必要がある。その場合、株主という存在は会社の最高意思決定機関である株主総会の構成員という位置づけになる。株主総会は会社機関であり、総会は会社の意思決定に影響を与えられるが、その決定は会社の社会貢献や持続性に向けられるべきであり、ひとり株主の利益に奉仕するような性格のものではないのである。このような結論は株式会社を神秘体アナロジーで捉える会社観からの必然である。

注

- 1 「同時代の他の著述家たちの著作のなかに、我々はこれと類似の二分法を見出すことができる。たとえば、ノジャンのグイベルトゥスは「主の二分された身体」(corpus dominicum bipertitum)について論じ、原型としての個人の体と(神秘体)とを区別し、後者は(比喩的身体)(corpus figuratum)とも呼ばれている。そしてキリストは、自らが個体として有する原初的身体(corporis principale)から出発して、彼の超個体的な(神秘体)へと人類を導いていくことを意図したと、彼は主張した。1200年前後の学者たちたとえばクレモーナのシカルドゥスやセーニのロタリウス(後のインノケンティウス三世)は、聖餐に関する彼らの議論のなかで、ほとんど習慣的と言ってよいほど、キリストの個人的な身体(corporis personale)と集団的な(神秘体)とを区別していた。そして、
- 13世紀の最初の四半世紀に、オーセールのグリエルムス(ギヨーム)はキリストの二重の身体(duplex corpus Christi)について考察し、自然的身体(corporis naturale)と神秘体とを対照させていた。」(訳 pp. 262-263)
- 2 「聖別されたパンは、今や意味深長な仕方でキリストの真の体(corporis verum)ないし自然の体(corporis naturale)、あるいは単にキリストの体(corporis Christi)と名づけられ、また、この最後の言葉にちなんで、キリストの聖体の祝日が1264年に西方教会により設けられたのである。」(訳 p. 259)
- 3 「中世の全世紀を通じて相互に影響を及ぼし合った教会と国家の間での無限の交錯関係は、それぞれの陣営に混成物を生み出した。位階を表わす標章、政治的象徴、そして特権や栄誉の相互的な貸し借りや交換が、キリスト教社会の霊的および世俗の指導者の中で、継続的にとり交わされたのである。教皇は自らの三重冠を黄金の王冠で飾り、皇帝の紫衣を纏い、そしてローマの街路を荘厳に行進するときには皇帝の旗を先頭に立てた。他方、皇帝は自らの帝冠の下に司教冠を被り、教皇の靴やその他聖職者用の衣装を身につけ、戴冠式の際には司教と同じように指環を授与された。初期中世にあっては、このような交換は主として霊的および世俗的な個々の支配者のみに関わるものであったが、最終的には、教皇権(sacerdotium)は帝権のごとき外観を呈し、王権(regnum)は聖職的な色合いを帯びるに至るのである。」(訳 p. 255)
- 4 15世紀末のイングランドにおいて団体論的観念がどの程度発展していたかについて、カントーロヴィチは、たとえば、「王と領主と平は一つの団体である」との首席裁判官フィニューの言葉を例に挙げて、「厳格に団体論的な解釈」が成立していたことに言及しながらも、有機体論的な観念も根強く残っていたことを指摘する。すなわち、「頭と四肢とを区別する古い有機体論的な観念が依然として広範にいきわたり、王は単に神秘体ないし政治的身体がそこにおいて頂点に達するところの頭とされていた」ともいう(訳 p. 296)。
- 5 「一つの「身体」としての教会に、同じく一つの「身体」としての国家を対置させる初期の具体例は、叙任権闘争のパンフレットのな著作の

なかから現われた」という。そして、教会の一つの身体 (unum corpus ecclesiae) と 国家の一つの身体 (unum corpus reipublicae) を対置させる考え方は、「当時としては慣例の有機体的な概念」であり、国家を一つの身体とみなす有機体的解釈は、「ソールズベリーのヨハネスの 国家は或る種の身体である (res publica corpus quoddam) という有名な言葉」があるように、「常套的な思想」であったという。「ところが、十三世紀の中葉にポーヴェのウィンケンティウス (ヴァンサン・ド・ポーヴェ) 政治体を指し示すために『国家の神秘体』(corpus reipublicae mysticum) という用語を使ったとき、これは従来とは非常に異なったものを意味し、有機体としての国家のこれまでとは異なった様態を提示したものであった。これは教会に関する豊富な諸観念を借用し、通常は教会が保有している超自然的で超越的な諸価値の或るものを世俗国家へと移し換えた明白な一例なのである。」(訳 pp. 273-274)

6 特に16世紀のフランスにおいては、「神秘体の類比と王と王国との婚姻という比喩は、フランス王国の基本法に組み入れられるに至った」という(訳 p. 285)。

参考文献

- Bonhoeffer, D., 1972, *Gesammelte Schriften*, Bd. V, Hrsg. von E. Bethge, Chr. Kaiser Verlag Munchen. (森野善右衛門訳, 『教会の本質』, 新教出版社, 1976)
- 中條秀治, 2011, 「株式会社団体論と資本主義の未来 会社観の変遷と資本主義の可能性」『中京経営研究』, 第20巻 第1・2号
- 中條秀治, 2009, 「『団体の時代』と組織 稲村毅による『株式会社新論』批判への反論(4)」『中京経営研究』, 第19巻 第1号
- 中條秀治, 2009, 「集団概念と団体概念 稲村毅による『株式会社新論』批判への反論(3)」『中京経営研究』, 第18巻 第2号
- 中條秀治, 2008, 「株式会社は誰のものか 稲村毅による『株式会社新論』批判への反論(2)」『中京経営研究』, 第17巻 1・2号
- 中條秀治, 2007, 「法人論争とはなんであったか 稲村毅による『株式会社新論』批判への反論(1)」『中京経営研究』, 第17巻 1・2号
- 中條秀治, 2005, 『株式会社新論 コーポレート・ガバナンス序説』, 文眞堂
- 中條秀治, 1998, 『組織の概念』, 文眞堂
- Kantorowicz, E. H., 1965, *Selected Studies*, New York (甚野尚志訳, 『祖国のために死ぬこと』, みすず書房, 1993)
- Kantorowicz, E. H., 1957, *The King's Two Bodies: A Study in Mediaeval Political Theology*, Princeton University Press, (小林 公訳, 『王の二つの身体 (上下)』, ちくま学芸文庫, 2003)
- Lubac, Henri de, 2006, *Corpus Mysticum The Eucharist and the Church in the Middle Ages* ; translated by Gemma Simmonds with Richard Price and Christopher Stephens; SCM Press.
- McGrade, A. S., edited, 2003, *The Cambridge Companion to Medieval Philosophy*, Cambridge University Press, (川添信介監訳, 『中世の哲学』, 京都大学学術出版会, 2012)
- 八木雄二 『天使はなぜ墮落するのか 中世哲学の興亡』 春秋社
- 山内志朗, 2008, 『普遍論争』, 平凡社
- Weber, M., 1920, *Die protestantische Ethik und der Geist des Kapitalismus*, *Archiv fur Sozialwissenschaft und Sozialpolitik* (Bd. XXu. XXI) (尾高邦雄編, 「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」『世界の名著61 ウェーバー』, 中央公論社)
- Weber, M., 1889, *Zur Geschichte der Handelsgesellschaften im Mittelalter*, (Lutz Kaelber, translated 2003, *The History of Commercial Partnerships in the Middle Ages*, Rowman & Littlefield)